# 第6講：103「間違いのないように」

おやさと研究所主任
堀内みどり　*Midor Horiuchi*

明治十五年七月、大阪在住の小松駒吉は、導いてもらった泉田籐吉に連れられて、お礼詣りに、初めておぢばへ帰らせて頂いた。コレラの身上をお救け頂いて入信してから、間もない頃である。

教祖にお目通りさせて頂くと、教祖は、お手ずからお守りを下され、つづいて、次の如く有難いお言葉を下された。

「大阪のような繁華な所から、よう、このような草深い所へ来られた。年は十八、未だ若い。間違いのないように通りなさい。間違いさえなければ、末は何程結構になるや知れないで。」

と。駒吉は、このお言葉を自分の一生の守り言葉として、しっかり守って通ったのである。

**泉田藤吉と小松駒吉**

泉田藤吉は、大阪の天理教を語る時には欠かせない布教者である。以前、早田一郎氏は本誌150号で「河内から大阪に伸びた伝道線に天恵組という講があり、そこに泉田籐吉がいた。西国巡礼の強力（ごうりき）などをしていたが、胃がんを助けられ入信。かしもの・かりものの教理に感動しておたすけに奔走した。泉田の伝道は猛烈で蒸し芋屋をしながら、病人と聞くと屋台を道ばたに寄せおたすけに走った。泉田から教えを受けた人に、茨木基敬（北大教会初代）、小松駒吉（御津大教会初代）、中西金次郎（大江大教会初代）、寺田半兵衛（網島分教会初代）などがいる。」と述べ、高野友治氏は「明治20年頃の大阪の信者の約半分くらいは泉田氏とかかわりのある人ではなかったか。」（高野友治『天理教伝道史（大和・河内・大阪・和泉篇）――調査資料として』道友社、昭和29年）と言う。

小松駒吉は、慶応元年生まれ、明治15年、泉田のおたすけで入信。翌年には、天恵四番から別れて、天恵五番の講名を頂戴し、おたすけに奔走。大工をしていたので、「大工の講元さん」とも呼ばれていた。明治20年陰暦正月7日、教祖より赤衣を、12月4日には本席より「おさづけの理」を拝戴した。明治24年11月、御津支教会初代会長に就任。大正12年本部准員、昭和8年11月本部員となり、昭和9年2月70歳で出直した。

高野氏は、逸話篇に収められた逸話について次のように伝えている。教祖に「いくつになられました」と尋ねられた駒吉が「18歳でございます」と答えると、「若いなあ、若いなあ、若いなあ」「つつしみなされや」と言われた（高野、前書）。そして、「生神様の御前に参じ、その上親しくお言葉をかけていただいたので、呆然としていたそうです。すると取次人の山沢良治郎が、別室へ下がってから、『あんた、今、教祖から“慎みなはれや”といわれたが、慎みとは何のことや知ってますか』とたずねたそうです。『いいえ、分かりません』『慎みというのはな、身の行いをつつしむことです』と教えてくれたそうです。」（高野友治『先人素描』天理教道友社、昭和54年）。若い駒吉が、“慎みなはれや”（「間違いのないように」）といわれ、戸惑っていたことが伝わってくる。

このことについては、小松初郎氏は「この教祖のお言葉には、さらに深い神意があったのではないかと思えてならない。その理由の一つが、駒吉の人柄にある。」（小松初郎「謹厳実直に歩んだ生涯」道友社編『“逸話のこころ”をたずねて–現代に生きる教祖のおしえ』道友社、2013年）と述べる。

**小松駒吉の人柄**

高野氏は「謹厳実直の方であった」と述べ、「教理は実に微に入ったもので、借物貸物、十柱の神様の表守護裏守護と、それは大したものでした」という上原さとの語りを伝えている。また、小松氏は、「大工職人の駒吉は字を知らなかったが、お道を学ぶため、新聞活字を手本に字を覚えるほど真面目な性格であった。直筆の覚書には、活字をそのまま写したような几帳面な字が並んでいる。」と述べ、次のようなエピソードを語っている。後年、大阪教務支庁の会計を任された駒吉は、一人ひとりの弁当代まで細かく帳簿に付けていた。府の役人が帳簿を調べにやって来た時、駒吉が雑費まですべて見せたので、「今日ご馳走になったお茶も、私の名前と一緒に値段が付くのやな。こんな堅い人なら安心や」と笑いながら帰ったという。また、（大阪でも警察の弾圧が厳しくなっていた頃）勾留当初は食事も喉を通らなかった駒吉だが、教祖の御苦労を思うと心が勇み、いつ警察に勾引されてもいいように、パッチや足袋を重ねて履き、おつとめを勤めていたという。

一方では、泉田の講社から離れ、自分の講社を持って布教に励み、幾人もの信者ができてきたが、後に別に講社を作り、また他に部属した信者もあった。明治21年2月6日「小松駒吉講社大いにいづむに付願」の「おさしづ」では、「多くの根もちゃんと埋りてある。旬がある。旬が無けら、芽も吹かん、と、めん〳〵の心では何でこうであろう〳〵と思うやろう。……誠の精神なら、埋りて置く根があれば芽が吹く。」と諭されている。

この辺りの事情については、小松初郎氏は、「明治20年陰暦正月26日、教祖が現身をかくされた際には、その神意を理解できない信者が、駒吉の講社から離れていった。その上、警察の干渉も一層激しさを増したため、駒吉一人が信仰するような事態になった。一時は不足の心を募らせたが、本席・飯降伊蔵を通して『おさしづ』を頂き、･･･翌日、おさづけの理を拝戴した駒吉は、以後、生涯にわたって腹を立てない誓いを立てたという」（小松。前掲書）。駒吉の真面目すぎるほどの人柄が理解される。それゆえに、教祖は、駒吉に「駒吉の将来を見越した上で、世上のさまざまな欲に流されることなく、本人の徳分や性分に見合う道を歩ませようと、『間違いのないように』と仰せになったのだと思えてならない」（小松、前書）と、語っている。

**若い人のために：「間違いのない通り方」**

晩年、駒吉は日常の些細なことでも「ありがたい、もったいない」と心から喜び、大教会の信者にも、口癖のように「結構やで、喜びなされや」と話したという。駒吉自身の教話には、自らが病に倒れた時を例に「私たちは、忘れてはならないことで忘れてしまっていることが、随分ございます。例えば、水や空気のありがたさ、また、身の内のご守護のこと。忘れてしまのが人間の常ですから、どうか、私の身上の時のようなことのないよう、お働き下さいますことをお祈りいたします。」（小松駒吉「わかりすぎて、わからないこと」『続本部員教話抄　天理教教理のエッセンス』天理教道友社、1997年）と語っている。

上田嘉世氏は、「間違いのないように通る」ためには、判断に迷ったなら「間違いのない地図」である教祖のひながたという地図をしっかり見ることが大切（上田嘉世「おやさまと若者–現代を生きる君へ　第1回 間違いのないように」『Happist』2012年4月号）であると述べる。間違いのない通り方とは、教祖に常に立ち返り、それを人生航路の「地図」として歩むこと、日々の守護を喜び忘れないこと、日々常々に互いに「結構」という方向へ向かって前進していくこととなろう。